

東京大学

理学部広報

第2巻 第5号 昭和45年5月15日

内 容

理学部会合日誌	2
教授会メモ	2
大学改革準備調査委員会関係記事（幹事会）	3
参考資料 ——東京大学と国および社会との関係——	3
——新しい総合大学を求めて——	4
大学改革準備調査会の報告書に関する教官懇談会	5
昭和45年度入学生の臨時カリキュラムについて（大木道則）	6
理学部ところどころ	6
学生関係事項	7
教官人事異動（2月1日より4月1日まで）	8
お知らせ（国際シンポジウム，留学生）	8

4 月 理学部会合日誌

教授会メモ

4 月 15 日 (水) 定例教授会
(13 時～ 於 物理新館会議室)

- 1 日 (水)
- 2 日 (木)
- 3 日 (金)
- 4 日 (土)
- 5 日 (日)
- 6 日 (月) 紀要委員会 (14:00～)
- 7 日 (火)
- 8 日 (水) 総合計画委員会 (13:00～15:00), 主任会議 (15:00～17:40)
- 9 日 (木) アイソトープ (14:00～16:00)
- 10 日 (金)
- 11 日 (土) 大学院進学ガイダンス (修士) (10:00～11:00)
- 12 日 (日)
- 13 日 (月) 入試委員会 (修士) (10:00～12:00), 理学系研究科委員会 (14:00～17:00)
- 14 日 (火)
- 15 日 (水) 教授会 (13:00～17:20)
- 16 日 (木)
- 17 日 (金)
- 18 日 (土)
- 19 日 (日)
- 20 日 (月)
- 21 日 (火) 臨時カリキュラム委員会 (10:00～12:00)
- 22 日 (水) 理職との会見 (11:00～12:00), 情報科学設立準備委員会 (12:00～14:30), 教官懇談会 (管理組織専門委員会報告書「東京大学と国および社会との関係について」) (15:00～18:30)
- 23 日 (木) 学生大会 (16:30～20:00 予定) (17:30～21:45)
- 24 日 (金)
- 25 日 (土)
- 26 日 (日)
- 27 日 (月)
- 28 日 (火) 学部学生ストライキ, 教官懇談会 (研究教育組織専門委員会報告書「新しい総合大学を求めて」について) (15:00～18:00)
- 29 日 (水) 天皇誕生日
- 30 日 (木)

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 卒業者決定の件
学生の休学の件
4. 学士入学の件
5. 研究生に関する件
6. 奨学寄附金ならびに物品寄附の件
7. 委員改選: 人事委員会および会計委員会の一部委員の任期満了につき改選が行なわれ, つぎの新委員が選出された。

人事委員: 野田教授, 岩堀教授

会計委員: 下郡山教授, 島内教授, 竹内 (均) 教授。

また, 全学の高速計算機委員として後藤助教授が推薦された。

なお, 幹事会の人選と山上会議所委員については学部長に一任された。前者については次のように決った。

幹事長 藤田 宏 教授 (数)

幹 事 塩田 徹 治 講 師 (数)

橋本 淑 夫 講 師 (物)

三 須 明 講 師 (物)

佐藤 良 輔 助 教授 (球)

馬 淵 久 夫 助 教授 (化)

佐 伯 敏 郎 助 教授 (植)

飯 島 東 助 教授 (質)

8. 雑 件

- 1) 教室主任の交代: 新教室主任は次のとおり。

(45. 5. 1 現在)

		内線	
数 学	河田教授	7504	
物 理	今井教授	3216	
天 文	末元教授	6169	
地球物理	浅田教授	6432	
化 学	藤原教授	3248	
生物化学	高宮教授	2440	
動 物	秋田教授	2413	
植 物	門司教授	2435	
人 類	渡辺(直)教授	6456	
地 質	岩生教授	2426	

内線

鉱物 定永教授 2419
地理 吉川教授 6448

- 2) 名誉教授推薦: 藤井 隆前教授が推薦された。
- 3) 昭和 44 年度卒業生 (理学部広報 Vol. 2, No. 4 に既報)。
- 4) 学内状況
- 5) 紀要委員会: 販路拡張について検討中である。
- 6) 幹事会
- 7) その他

理学部予算の実態調査 (中間報告)

9. 情報科学の研究教育について

情報科学研究施設の設立準備委員会が発足した。

理学部からの委員

学部長 久保亮五 (物)
委員長 高橋秀俊 (物)
後藤英一 (物)
藤田 宏 (数)
竹内 均 (地物)
赤松秀雄 (化)
竹内慶夫 (鉱)

他学部からの委員

森口 繁一 (工学部・計数工学科)
宮沢 光一 (経済学部)
藤村 靖 (医学部・音声言語医学研究施設)

10. 昭和 46 年度概算要求の方針について

赤松総合計画委員長より理学部の建物計画について説明があった。また、理学部からの施設の申請についての考えが述べられた。

11. 臨時カリキュラム実施について: 大木委員から全学カリキュラム, 要望専門課目の取りあつかい, 振り分けの問題など現状の報告があった。(別項参照)

12. 入試制度について

13. その他

大学改革準備調査会関係記事

幹事会

東京大学の管理組織の改革と研究教育組織の改革については、さきに組織問題専門委員会 (昨年 11 月に解散) において問題点の検討がすすめられ、その成果は「第一次報告書」第Ⅱ編にとりまとめられている (昨年 10 月公表, 理学部広報第 1 巻第 13 号参照)。しかしこの問題についてはなお検討すべき課題が多数残されていたの

で、「第一次報告書」の提出に先立ち新たに「管理組織」および「研究・教育組織」の二つの専門委員会が設けられその調査がすすめられていた (昨年 6 月発足, 理学部広報第 1 巻第 9 号参照)。本年 1 月「改革委員会 (教官)」が発足したのに伴い (理学部広報第 2 巻第 2 号参照), 1 月末日を以てその調査が打ち切れ、その結果がこのたび総長に提出された。

参 考 資 料

大学改革準備調査会管理組織専門委員会報告書

内 容 目 次

—東京大学と国および社会との関係—

(1970 年 4 月 7 日)

第 1 章 ま え が き

1-1 当専門委員会の任務と本「報告書」の範囲

1-1-1 当専門委員会の任務

1-1-2 本「報告書」の範囲

1-1-3 本「報告書」の構成

1-2 東京大学と国および社会との関係の基本的問題

1-2-1 大学の使命と「学問の自由」

1-2-2 「学問の自由」と「大学の自治」

1-2-3 大学に対する社会的要請と大学の社会的責任

1-2-4 大学行財政と大学の自治

第 2 章 現状分析とさしあたりの改善案

2-1 ま え が き

2-2 組 織 権

2-2-1 ま え が き

2-2-2 現行法制の仕組

2-2-3 運 用

2-2-4 問 題 点

2-3 人 事 権

2-3-1 ま え が き

2-3-2 任命権の所在

2-3-3 職員の種類とその問題点

2-3-4 職員の人事交流

2-4 財 政 権

2-4-1 ま え が き

2-4-2 大学予算の編成

2-4-3 大学予算の執行

2-4-4 大学予算の構成と規模

2-4-4 決算・会計検査と財政の公開

2-5 財 産 管 理 権

2-5-1 ま え が き

- 2-5-2 現行制度
- 2-5-3 運用と問題点
- 2-6 運営関与権
 - 2-6-1 ま え が き
 - 2-6-2 指導助言権の性格
 - 2-6-3 運用と問題点
 - 2-6-4 制度上の欠陥
 - 2-6-4 研究教育にかかわる諸法規
- 2-7 さしあたりの改善案
 - 2-7-1 ま え が き
 - 2-7-2 組 織 権
 - 2-7-3 人 事 権
 - 2-7-4 財 政 権
 - 2-7-5 財 産 管 理 権
 - 2-7-6 運 営 関 与 権
- 第3章 根本的改革の方向
 - 3-1 ま え が き
 - 3-2 改革の基本的方向
 - 3-2-1 制度改革に際しての前提
 - 3-2-2 大学行政を所管する国家的機関のあり方
 - 3-3 大学委員会の下における大学のあり方
 - 3-3-1 考えられるもう一つのあり方
 - 3-3-2 特殊法人としての大学のあり方
 - 3-3-3 新しい「大学の自治」

大学改革準備調査会研究・教育組織
専門委員会報告書

内 容 目 次

—新しい総合大学を求めて—

(1970年4月10日)

第1章 序

- 1-1 本報告書の取り扱い範囲
- 1-2 本報告書の要点
 - 1-2-1 本報告書の基本的発想
 - 1-2-2 本報告書の概要

第2章 総 論

- 2-1 東京大学における研究・教育の理念
 - 2-1-1 大学における研究・教育と社会
 - 2-1-2 東京大学における研究と教育の関係
 - (1) 問 題 点
 - (2) 教授個人における研究と教育の関係
 - (3) 大学全体の問題としての研究と教育の関係
 - 2-1-3 東京大学における研究・教育の欠陥
 - (1) 東京大学の「特殊的地位」に安住していたこと

(2) 「総合大学」の実をあげてこなかったこと

- 2-1-4 教授団の自己規律
- 2-2 東京大学における研究・教育組織の理念
 - 2-2-1 研究・教育組織の一般論
 - 2-2-2 東京大学における研究組織と教育組織の関係
 - 2-2-3 東京大学における研究・教育組織の欠陥
- 第3章 東京大学における研究
 - 3-1 東京大学における研究の問題点
 - 3-2 東京大学における研究
 - 3-2-1 東京大学における研究のあり方
 - 3-2-2 大学における研究の特色
 - 3-2-3 現代における研究の特色
 - 3-3 東京大学における研究組織
 - 3-3-1 東京大学における研究組織のあり方
 - 3-3-2 東京大学における研究組織
 - (1) Institute, Laboratory
 - (2) Research Group
 - (3) 「研究連絡委員会」および「研究連絡センター」の設置
 - 3-3-3 単位研究組織の構成—「研究員」

第4章 東京大学における教育

- 4-1 大学教育の問題点
- 4-2 東京大学における教育の理念
 - 4-2-1 序
 - 4-2-2 東京大学における教育の理念
 - 4-2-3 教育理念の実現のための新制度—「総合課程」, 「専修課程」, 「研究者養成課程(大学院)」の分化と統合
 - (1) 用語の問題
 - (2) 三課程の分化の必然性
- 4-3 東京大学における教育組織
 - 4-3-1 「総合課程」
 - (1) 「総合課程」の概要
 - (2) 「小専攻」制
 - (3) 「総合カレッジ」案の採用
 - (4) 「総合課程」の内容と運営
 - (5) 外国語教育の意義—「総合課程」の理念との関連
 - 4-3-2 「専修課程」
 - (1) 「専修課程」の必要性和問題点
 - (2) 教育機関としての附属病院—「専修課程」の問題点の典型的事例
 - 4-3-3 研究者養成課程(「大学院」)
- 4-4 東京大学における学生の流れ
 - 4-4-1 卒業制度の廃止

- 4-4-2 入学試験制度の問題点
- 4-4-3 学生の入学と学修の課程
- 4-5 教育に関する意思決定および執行機関
 - 4-5-1 Department および Division の役割
 - 4-5-2 「教育運営委員会」および「教育運営局」の設置

第5章 教授団

- 5-1 教授団の組織の問題点
- 5-2 教授団の構成の基準
- 5-3 学部・研究所の廃止と再編成
 - 5-3-1 Department
 - 5-3-2 Institute
 - 5-3-3 Division
 - 5-3-4 その他
 - 5-3-5 学部・研究所の廃止・再編成に伴う若干の問題
 - (1) 「格差」問題
 - (2) 外国語教育，体育教育の問題—「言語文化研究所」の必要性
 - (3) 共同利用研究所の問題
 - (4) 附属病院の問題

- 5-4 「講座制」の廃止と再編成—Laboratory
- 5-5 教授の定員と人事

附 図

- A 現状，東京大学における入学，進学，卒業，就職の流れ図
- B 改革の方向
 - B1 「総合課程」，「専修課程」，「研究者養成課程」の概要
 - B2 教育と研究の運営組織の構成
 - B3 Department と Institute
 - B4 Division と Department
 - B5 「専修課程」教授団と「総合課程」教授団との関係の型

大学改革準備調査会の報告書 に関する教官懇談会

4月22日(水)，大学改革準備調査会管理組織専門委員会が先に発表した報告書東京大学とおよび社会との関係についての理学部教官懇談会が午後3時過ぎから約3時間化学教室会議室で開かれ，理学部長はじめ14名の教官が出席した。管理組織専門委員会の委員であった山口教授からはじめにこの報告書の概要について説明があり，ひきつづいて報告書の提案した審議会および大学委

員会の問題を中心として意見を交換し，とくにその実行上の問題点について検討した。

“審議会”および“大学委員会”の構想は，これを案として，研究教育組織専門委の報告書の内容である“東大が将来どういう大学になるか”という点とも関連させて，改革のプロセスにのせてゆくのがよいであろうという意見が有力であった。しかし，これらの案の裏づけとなる大学内部での管理，運営面での具体的な検討が必要であることが指摘された。また国家予算の中で，大学経費の占める割合についても，たとえば5年毎の長期的展望をたてて，国家として大筋を決めていく必要のあることも論じられた。改革は，1セットとしての改革ではなくて，出来るところからはじめることが現在重要であるとの意見があった。この種の実現は一つには総長の決断にかかっているといえることも指摘された。

4月28日(火)，午後3時から6時まで大学改革準備調査会研究教育組織専門委員会報告書——新しい総合大学を求めて——についての理学部教授懇談会が化学教室会議室で開かれ，理学部長はじめ教官16名が出席し，報告書全般について意見を交換したが，本報告書に対してきわめて批判的であった。

主な意見のいくつかを以下に述べる。本報告書は学問の分野による研究および教育の方法のちがいについての配慮が乏しく思われ，その結果提案されている総合課程案は画一的なうらみがある。この提案は人文，社会科学系にとって適当かも知れないが，基礎自然科学部門には必ずしも適しないと考えられる点が少なくなく，またそのまま適用してよいとは思われない。また総合大学をたて前として提案された総合課程に代るべきものとして，ゆるい結合の単科大学案あるいは数個のそれぞれ独得の色彩をもったカレッジを並列し，互いに相補的相互批判的である案なども検討の上，その経緯が報告されるべきではなからうか。さらに一つの学問を深く学ぶことにより総合に至る道が考慮されていないのではないか。教育を強調するあまりその根底にある研究についての論議が十分でないこと，予算面での検討の乏しいこと，とくに理学部としては大学院について具体像の描かれていないことに対する不満，また報告書が統一的理念に走るあまり，技術的数量的検討を欠き，かなり技術的に困難かと思われる提案をしているように見られることなどが指摘された。また現在の一般教養課程の問題に答えずに総合課程を論じて行くことの危険も考えられる。

さらに細部についても議論されたが，とくに“専修課程”とは何かまたそれをどのような分野におくべきであ

るか、総合課程終了時の学力は現在よりも高いが、また理学部学生は現在各教室に“居住の巢”に類するものをもっているが、総合課程ではこのような巢を失うのは学生にとって不便ではないのか、35 単位もの小専攻制は理学部系として適しているのか、提案の総合課程案は現在米国で実施されているものに近いが、この方式が米国で現在問題を生じていること、教官人事についての Department と Institute との意見のかね合いをどうするか、などが話題となった。

本懇談会終了後、中央図書館で開かれた全学の教授懇談会 4 月例会“新しい総合大学について”にもひきついて多くの理学部教官が出席し、本報告書作製者らの意見を聞き懇談した。

昭和 45 年度入学生の臨時カリキュラムについて

大木道則

昭和 45 年度入学生に関する臨時カリキュラムについては、去る 2 月の評議会においてその大綱が決定され、3 月の評議会において関連する教養学部規則改正が行なわれて、実施されることになった。この改革の要点は、①全学的視野で、一般教育ゼミナールを設けること、②相互クサビ型を軸として、専門科目または専門的視野に立った一般教育科目を教養 3 学部第 3 学期に設け、それに相当する一般教育科目を本郷各学部においても聴講できるようにすること、を 2 本の柱としている。

全学一般教育ゼミナールについては、理学部からも、とりあえず 6 個のテーマをあげ、これに協力しているが、将来さらにいくつかのテーマについて、参加が見込まれている。

第 3 学期の新設科目としては、理学部としては専門科目をそのまま第 3 学期におろすということをせず、専門的視野にたった一般教育科目の設置に賛同した。この科目は次の 7 つである。解析 I、解析 II、量子力学、現代物理学、有機化学、材料科学、線型系理論。これらの学科目の内容については理学部としても大いに関心をはらう必要があり、それぞれの科目に、1~2 名の教官が参画して、内容を検討することになっている。

理学部としての、この点に関するもう一つの関心事は、第 3 学年および第 4 学年において、一般教育科目 8 単位を取得するための時間帯を設定しなければならない点である。学科によっては、現在のままでは、8 単位分の時間を設定する余裕がないので、一般教育科目として

設定された上記 7 科目を専門科目の単位として認定する必要があるであろう。この点については、現在なお検討中である。

以上の点は、当然のことながら理学部全体の、特に第 4 学期の課目に、大きな影響を与えることでもあるので、教官側としても今後慎重に検討を重ねるが、学生、職員からも、意見のあるむきは積極的に提言をしていただきたいものと思う。これらの件に関しては、理学部では、私が中心になって検討を進めているので、必要な情報は御要求があり次第提供することができる。

なお、教養学部の規則改正によって、理学部における要求および要望科目は次のように変更になっている。

要求科目

数学 4 単位、物理 4 学単位、物理学実験 1 単位、化学 4 単位、化学実験 1 単位 ①地学 4 単位と地学実習 1 単位、②生物学 4 単位と生物学実験 1 単位、③図学 4 単位と製図 1 単位 (①, ②, ③のうち 1 組以上)、外国語 (英独、英仏、英露のいずれかの組合せで 2 カ国語) 14 単位、体育 4 単位、人文科学のうち 2 科目 8 単位以上、社会科学のうち 2 科目 8 単位以上、合計 53 単位以上。

文科から地学科地理へ進むための必要単位は、数学、物理学、化学、生物学、地学、図学、科学史のうち 3 科目 12 単位、外国語 (英独、英仏、英中、英露のいずれかの組合せで 2 カ国語) 14 単位、体育 4 単位、人文科学のうち 2 科目 8 単位以上、社会科学のうち 2 科目 8 単位以上、合計 46 単位以上。

要望科目

解析学 I、解析学 II、量子力学または現代物理学、有機化学、材料科学、線型系理論、合計 6 科目のうち 4 科目以上。

理学部とところどころ

化学教室旧館のこと

昭和 44 年 4 月 8 日付け報知新聞の朝刊に、「東京の西洋館」という題のシリーズ記事の一つとして、東京大学理学部化学教室の建物が一水会の近岡善次郎氏のスケッチを添えてとり上げられている。徳永直子記者によるその記事は大変よくしらべられているので記者の御諒解を得て、これをもとにして、若干の補正と教室先輩の方々のお話を加えつつ以下に化学館の紹介を行ないたい。

上記の記事は建物外観の文学的描写で始まる。「赤レンガを白いコンクリートでふちどりの美しいルネッサンス風の理学部化学旧館。長方形の二辺のかどに玄関を

おいた左右シンメトリーの建物は、地下一階、地上二階建てで、建て面積は 3345 平方メートル、大正 2 年 7 月施行、同 5 年 3 月完成で、当時日本では珍しい鉄筋コンクリートで、しかも建材はいっさい国産品でまかだったのでなみなみならぬ苦心があった。設計者は東大営繕課長だった山口孝吉氏で、同氏は良心的で、とくに美しい仕上げに心を用いられる方であった。それで、コンクリートの表面を紙ヤスリで仕上げを命じ、またタイルや礎石も気に入らぬと何回もやり直しをさせるなど石屋その他を泣かせること多大であったという云々。」

とにかく始めての鉄筋コンクリートの大きい建物というので強度計算を工学部の柴田雄次教授に依頼した。同教授も大いに苦心してその衝に当たられ、お蔭で完成した建物は長い年月にも全く狂いを示さず、玄関の造作などは今日老練な職人が感嘆するまでである。ただし、強度計算で安全計数を甚だ高く設定したので、玄関など局所的には今も狂いが無いが、全体的には玄関の左右両翼の建物の中央部に上下に建物を縦断してキレツが生じ建物はあたかも大きな三つのブロックになって独立に運動することとなった。構造力学上有用な演習問題たりうるかもしれぬ。ともあれ、奥床しい色調の赤レンガの外観といい、4.25 メートル（2 間余）の高さの天井といい、住人には深い愛着の情をもたしめる建物である。最近この建物も寄る年波に勝ち得ず、かつては風雨によるコンクリートの流亡を防ぎ、また美観を増した外壁のタイルが剝落して通行者を脅やかすにいたった。それで、教室の当事者はタイルを新たに焼いてその補修をすることを考えたが、実際にしらべて見ると同種のものを新たに焼くことは膨大な費用を要するというので取り止めになった。さらにいうと、旧館を今日の用に役立たせるために模様変えをしようとする時、コンクリートの壁はタガネも歯が立たない。昔のことゆえ、コンクリートは上からバケツで落としてつき固めたものと思われるが一筋縄でゆかぬ建物である。さらについてながら付言すると、現在の化学新館の位置にはもと度量衡原器の保存と重力原点を保持するための赤レンガの、すその張り出た四角い建物があった。これを新館建設のために取りこわしにかかったところ、ほぼ地上の建物と同じ高さの石積みが地下から出て来た。これを周囲の研究室の活動を妨害しないよう爆薬などを用いずに苦心して取り除いたところ、さらにもう一層楼の石積み土台があらわれ、しかも念の入ったことにこの土台は鉄のベルトで固く結び合わされていて、辰野金吾博士の設計ときくこの造築物には、工作の周到さと、とりこわしの費用に昭和の関係者が降参したことであった。旧館といい、これといい、明

治の頑固がつくり上げた結構というべきであろう。

徳永記者はさらに旧館の屋根についてのべている。旧館の屋根はナマリ葺きであるが、これは当時、化学の側から建築に参画された池田菊苗教授が、瓦葺きでは瓦をとめておく釘がドラフトからのガスにおかされ、その結果瓦の脱落があって危険であろうとして、平らな屋根の上にさらに三角屋根をのせ、その表面に 2.5 ミリメートルのナマリ板をはりつめたのであった。当時としてもこれは思いきった出費であったに違いない。さて、その効果のほどは所期の目論見に対しては何ともいいがたいが、関東大震災のとき、瓦屋根はみな瓦がおち、そのためたとえ数学の教室は瓦の落ちたあとに飛び火があり罹災したが、化学は火災をまぬがれた。それは一つはナマリ屋根のお蔭といえるかも知れぬとは元科学博物館長朝比奈貞一氏のお言葉である。とにかくナマリ葺きの屋根は本邦唯一であろう。

この建物からは旧制で 1012 人、新制で 548 人の理学士が巣立って行った。新制度下の大学院生は中途退学や所属やらでははっきりいえないが数えれば約 500 人くらいであろう。また、化学館に縁故をもつ人といえ、講義をききに入られた人達を別にすると化学旧新館（大正 11 年 5 月着工、同 12 年 3 月竣工）には、震災後理学部 1 号館に居住することが不可能となった物理の木下・寺田などの諸教授が学生と一緒にいられて研究をされた由である。長い時間の間においてどういう人が、どこで、どういう実験や研究を行なったかなどというエピソードは興味もあり、また科学史の上で、誰と誰が近くに住んでどういう影響をしあったかなどということも真面目に記憶されてよいことかと考えるが、それらは別の機会にまとめられることもあろう。ただ、大学の習らいで、教官、学生のみでなく職員にも名物男があったのは化学館もしかりであって、その一二の例をあげれば、小使から傭をへて雇になってもずっと実験器具の保守管理に当たった配島氏や、内庭に花と金魚を育て、そして居残り実験に厳格な監督を 44 年つづけた戸田忠一郎氏などは忘れがたい名とする人も多いであろう。

本稿執筆にあたり記事の転用を許された報知新聞文化部および種々御教示を賜わった柴田雄次先生、朝比奈貞一博士に厚く御礼申し上げる。（藤原鎮男）

学 生 関 係

学生ストライキ関係

4 月 23 日（木）理学部学生大会が理学部 2 号館講堂

で午後4時から8時の予定で開かれたが、予定より遅れて午後9時40分ごろ終了した。4.28 ストライキ実施、カリキュラム闘争推進および五月祭の成功と自由ゼミ発展をスローガンとした常任委員会提案は下に示す投票数にもとづいて可決された。投票時の議場在席数89、議場委任24、合計113(ただし定足数101)。常任委員会提案賛成53、反対23、保留9。

ストライキ提案について批准投票をおこない、賛成119、反対26、保留33、白票3、合計181票をもって、上の提案が批准された。

泊 り 込 み

4月27日 学部自治会委員等は28日のストライキの前夜の行動として午後10時の退出時間後物理学生控室に居残った。時間外居残りは実験のため止むを得ない場合以外は許可されないで、理学部長は当番教官、理学部学生委員を通じて数次に亘り退出を求めたが、十数名は応ぜず残留を続けた。

4月28日(火) 4月23日のストライキ提案とその批准にもとづいて学生ストライキがおこなわれたが全般に平静であった。いくつかの教室では少数の学生に対して授業のおこなわれたところもあった。

教官人事移動 (除退・休職)

氏名	所属	発令事項	発令年月日
斎藤 太郎	化学	工学部助手より配置換	45. 2. 1
宮田 元靖	地物	助手に授用	45. 2. 1
江上 信雄	動物	教授に転任	45. 2. 16
武田 弘	鉱物	講師に昇任	45. 3. 1
小柴 昌俊	物理	教授に昇任	45. 3. 1

氏名	所属	発令事項	発令年月日
大西 孝之	動物	助教授に昇任	45. 3. 1
国分 征	地物施設	助教授に昇任	45. 4. 1
永田 豊	地物	助教授に昇任	45. 4. 1
塚田 捷	物理	助手に採用	45. 4. 1
吉沢 徹	物理	助手に採用	45. 4. 1
小沢 徹	鉱物	助手に採用	45. 4. 1
坂内 英一	数学	助手に採用	45. 4. 1
金子 晃	数学	助手に採用	45. 4. 1
森田 康夫	数学	助手に採用	45. 4. 1
上野 健爾	数学	助手に採用	45. 4. 1
吉田 鎮男	地質	助手に採用	45. 4. 1
長谷川政美	生化	助手に採用	45. 4. 1

お 知 ら せ

◎コンピューターに関する国際シンポジウム 開催について

期 間: 1970年10月14日~17日
場 所: イスタンブール工科大学
使用語: トルコ語, 英語
費 用: 自己負担
締切日: 6月1日

◎昭和45年度スエーデン政府奨学金 留学生の募集について

専攻分野: 人文科学, 社会科学, 自然科学
応募資格: 大学卒業者, スエーデン語, 英語, ドイツ語の能力を有する者
締切日: 5月27日

編集 和田昭允 (広報委員)
理・1号館 217号室 内線 2298

運動会入会のお誘い

新緑の候、スポーツに旅行に待望の好季節となりました。本学では全学部学生が運動会会員となっておりますが、教職員ならびに大学院学生、研究生の皆様も入会していただき野球その他のスポーツあるいは各地に設けられた体育保健寮を中心とした諸施設をご利用いただけるよう会員制度を設けております。理学部の方々もどうぞ振って入会下さるようお願い申し上げます。(入会申込書は理学部事務室に用意してあります)

東京大学運動会理事長

松 田 智 雄